個人蔵本「住吉物語絵巻」について

田中亜季*

要旨

「住吉物語」は「落窪物語」同様に典型的な継子物語である。現存作品としては奈良絵本に多く見られ、本稿で紹介するのは巻子だが奈良絵本に分類される。

本稿では個人所蔵の奈良絵本絵巻「住吉物語」全三巻の調査報告と、若干の考察を試みた。調査報告ではまず本作の概要を述べ、各段筋書と挿絵について記した。本作の挿絵が抜き取られている可能性に注目し、他の奈良絵本「住吉物語」と挿絵位置の比較を行い、本作は当初かなりの挿絵を有していた可能性を指摘した。絵画表現についても触れ、構図と画面構成、人物表現、絵師の三点より考察した。

キーワード：①住吉物語、②奈良絵本、③絵巻、④挿絵

はじめに

「住吉物語」は「落窪物語」同様に典型的な継子物語である。貴人の恋愛模様を描くと共に、初瀬（長谷）寺の観音の霊験も随所に登場させる。物語としては古様のものは十世紀後半の平安時代に成立し、鎌倉時代には擬古物語として現在の形に改作されたというのが通説で、異本が多く百二十本余りも存在するとされる[1]。絵巻物としては東京国立博物館本と静嘉堂文庫本が代表として挙げられるが、完全な形としては残っていない[2]。奈良絵本には「すみよし」の完本が多く見られる[3]。

この度個人蔵本の絵巻を調査させていただく大変貴重な機会に恵まれた。本稿では作品の調査報告と共に若干の考察も加える。なお、本絵巻の詞書及びその翻刻については、本号掲載の原口志津子教授の資料紹介を参照されたい。

令和３年９月15日受理　*文学研究科文化財史料学専攻博士前期課程　在学生

一　書誌

本稿で取り上げる個人蔵本「住吉物語」（以下、個人蔵本、本作）（図1）の書誌は次の通りである。

巻子装で上中下の三巻からなり、甲盛被蓋の桐一重箱に揃って納められる。

上巻の法量は縦が三十二・六cmで横の総長が九七一・五cm。各料紙の横を含む法量の詳細は表1の通りである（中下巻に同じ）。表紙（図2）は紺紙に金泥で波に松と藤を描き、朱の題箋には「住よし物語上」の外題が墨書されている。見返は金箔で、麻の葉文様を地にして所々に丸文の龍を置く。現状では詞四段、絵三段で構成される。

中巻の法量は縦が三十二・六cmで横の総長が九九五・七センチ。金襴緞子の表紙で題箋は無く、金箔の見返を有す。現状では詞五段、絵四段で構成される。この中巻のみ表紙が異なり、当初は他巻と同じく紺紙金泥で朱の題箋が付けられていたが、現在のものと差し替えられた可能性が考えられる。

下巻の法量は縦が三十二・六cmで横の総長が一〇〇九・〇cm。表紙は紺紙に金泥で波に松竹梅を描き、朱の題箋には「住よし物語下」の外題が墨書される。見返は上巻と同じく金箔で、麻の葉文様を地にして所々に丸文の龍を置く。現状では詞五段、絵四段で構成される。

上下巻発装は金具ではなく竹を使用。軸端は三巻とも金属製で、軸側面に宝相華、軸小口に菊花を表し、側面や菊花の中央には魚々子を敷き詰める。紐は三巻とも外れ、箱に収納されている。

全巻を通じて紙に厚みがある。中巻には総裏紙が捲れ料紙の層が顕わになっている部分（図3）があり、裏打ち紙が二重になっていることが分かる。これは後から付け足されたと思われ、上下巻も同様だろう。

表1より、一紙の幅は約五〇cmを基本とするが、例えば上巻十一紙のように極端に短いものも見られる。このように詞書の料紙に長短があるのは、文の最後の行より左側の紙が余った場合にその余白の部分を切り取り、それを他の部分の詞書へ転用したからである。このことは料紙装飾が途切れ、次の紙と隣接する部分が切り詰められていることからも判断できる。しかしこの手法は必ずしもすべてに行われたわけではなく、中巻九紙のように余白のまま残す場合もある。

各巻の挿絵だが、現状では上巻三図、中巻四図、下巻四図の計十一図となっている。本作挿絵はいくつか抜き取られている可能性が高い。その理由として表2にも見られるように、三姉妹が正月に嵯峨野で松引きをし、少将がそれを垣間見るという「住吉物語」の白眉とも言える場面が存在しないことが挙げられる。さらに料紙の切り取りから見ても同様である。これは先ほど指摘した料紙の切り詰めとは異なり、本来行われないはずの改行がなされていることから指摘できる。表1にも示したが、例を挙げるならば上巻二十紙と二十一紙の繋ぎが顕著である（図4）。本文としては、挿絵が抜き取られていることで、必然的に一段が長くなっている。

箱書は無く、また印章や落款、奥書等も無いため詳細な伝来や制作背景は不明である。しかし、華麗な装丁や物語の最後が繁栄で終わることから身分ある女性の嫁入り本[4]として作られた可能性がある。

「住吉物語」研究で知られる西下経一氏は本作を実見されており、その際に記された手紙が残っている。それによると、個人蔵本は京都国立博物館本（以下、京博本）に最も近く、共に略本系に属し[5]、挿絵に関しても位置や図柄はほとんど同じと指摘されている。さらに個人蔵本の制作年代について、京博本が江戸時代に制作されたことより、それに準ずるものと推定された。しかし本作表紙と詞書及び挿絵の年代観はそれぞれで異なるように思われた。そこで本学の魚島教授に御高配を賜り、表紙及び詞書料紙と挿絵の金を蛍光X線分析していただいたが、組成には明確な違いは見られなかった[6]。奈良絵本の表紙の中でも、特に江戸前期に写された「絵源氏[7]」と装丁が似ており、本作の表紙に関しては十七世紀中ごろのものではないかと推測する。

二　各段筋書と挿絵

（一）各段筋書

ここでは各段の筋書を記す。

上巻

【第一段】中納言には二人の妻がおり、一人は上達部の娘で二人の姫君を産んだ。もう一人は宮腹の娘で、見目麗しく寵愛を受け美しい姫君を産んだが、姫君がまだ幼いうちに母宮は病になり、中納言と姫君入内の約束を交わして亡くなった。姫君は乳母に育てられる。

【第二段】姫君は侍従（乳母の子）と共に中納言に引き取られ、継母とその娘たち（中の君、三の君）と共に暮らす。時の大臣の息子少将は、筑前という下女に姫君の美しさを聞き文を送る。

【第三段】筑前は少将からの文を届けるも、姫君から返事はない。そこに事情を聴いた継母が自分の娘の三の君に返事を書かせ結婚させる。謀られていることを知らない少将はそのまま三の君の所へ通う。

【第四段】秋の夜、少将の耳に琴の音が聞こえてくる。三の君に尋ねたところ、弾いているのは初めに心を寄せていた人だと気づく。自分が騙されたと知り、何も知らない三の君を哀れに思うものの、侍従を頼りに姫君へ心の内を表した文を送る。

その冬の正月、三姉妹は揃って嵯峨野へ行く。それを知った少将は先回りをし、大きな松に隠れて小松引き遊びをする様子を垣間見て、姫君への恋心が再燃する。

中巻

【第一段】中納言は宮中行事の五節を機に姫君を入内させようとする。継母は中納言に、六角堂の怪しい僧が姫君のところに通っていると嘘を吹き込み悪い噂を立てようとする。

【第二段】三の君の乳母はかねてより姫君を良く思っていなかった。継母とこの乳母は共謀して、姫君の部屋から男が出る所を中納言に見せる。すっかり嘘を信じた中納言は、姫君に入内の中止を告げる。何も

知らない姫君と侍従は、突然のことに返す言葉もなく困惑する。

【第三段】中納言が、入内の代わりに内大臣の息子である宰相の中将と結婚させようとしていると知った継母は、七十歳ばかりの主計頭に姫君を盗ませようとする。継母の再度の謀りを知った姫君と侍従は、尼になった亡き母宮の乳母を頼りに住吉へ逃れる。

【第四段】少将が中納言の邸宅へ行くと、姫君は居らず、書き残された歌を見て中納言は嘆き悲しんでいた。一方住吉の家は静かな住まいで、持仏堂には阿弥陀三尊が祀ってある。姫君と侍従はそこで尼君と共に朝暮と仏の御前で読経や花を供えるなどをした。

　冬も深くなった頃、姫君は尼君に仕える童に文を託し、中納言の邸宅へ遣わせた。それを読んだ中納言は文を顔に押し当て泣いた。

【第五段】正月の司召しの除目で、少将は中将に任命された。位は上がったものの気は晴れず、神仏に姫君の居場所を祈り続けた。しかしその甲斐もなく、季節は春夏と過ぎていく。

下巻

【第一段】秋になり、中将は初瀬に籠り姫君との再会を祈ったところ、夢で姫君の居場所を知る。従者は都へ返し、そのまま住吉に向かい姫君と再会を果たす。

　京より中将の縁者がやってきて、このような機会のついでとして音楽などの遊びをする。

【第二段】姫君は二年共に過ごした尼君と住吉に別れを告げる。一行は舟に乗り「心からうきたる舟にのりて」など歌いつつ淀まで上る。

【第三段】京に戻った二人の間に若君が生まれる。姫君の父は大納言になり、中将は中納言になった。それからほどなく中納言から大将になり、さらには姫君も生まれ華やかな様子である。

　大将は、若君と姫君の成長を祝う袴着に大納言を招き、御簾を隔てつつも久方ぶりに父を見た姫君と侍従は涙する。大納言は、姫君が幼い日の自分の娘に似ている事を不思議に思いつつも、昔を思い出し涙する。その日の帰り際、大納言は大将より袿を受け取る。

【第四段】大納言は、大将に渡された袿が昔自分の娘に着せた物だと気が付き急いで大将の邸宅へ向かい、ついに親子は再会を果たした。継母の悪事が明るみに出ると、人々は疎み離れていった。

　その後若君は元服し中将に、大将は内大臣を経て関白に、姫君は北政所、娘の姫君は十七歳で女御になり、侍従は内侍として重用された。

【第五段】姫君たちの栄華の一方で、継母は人々に疎まれ哀れな最期を迎えた。北政所が継母を供養すると人々は感動し、初瀬の観音の利生を称えた。

（二）挿絵

　個人蔵本の挿絵は現状では上巻三図、中巻四図、下巻四図の計十一図である。各挿絵と内容は以下の通りである。

上巻

【挿絵1】（図5）挿絵に入る直前の本文にある、乳母が姫君の髪をなでる様子を表す。画面左の袖を顔に当て頭をなでる仕草をするのが乳

母、目線を下に向け頭を差し出しているのが姫君で、廂の女性は侍従であろう。右側の簀子に高欄を巡らそうとした形跡が窺える。畳敷きの室内や柱に組み込まれた棚から、書院造以降の風俗で描かれていると思われる。壁や棚には水墨画が描かれ、棚飾本は紺紙金泥の表紙に朱色の題箋で奈良絵本の特徴を持つ。几帳と侍従の衣服の色は、黒みがかった茶と緑のどちらとも受け取れる色をしており、鉱物系の顔料にはあまり見られない色合いである。魚島教授に御高配を賜り顔料分析をしていただいた結果、鉛（Pb）が検出されたが、この結果から色料を推定することはできなかった（図16、17）。

【挿絵2】（図6）少将が姫君への文をしたためる場面を表したもので、左側の男性が少将、右側の女性が筑前である。本文中では神無月初めのため紅葉がさねの薄様に書くとあるが、挿絵ではそこまで表現されていない。

【挿絵3】（図7）上巻第三段の内容より、少将が三の君の所へ通う場面と思われる。画面右上に人物があり、左側が少将、右側が三の君である。少将は前の挿絵と同じ衣服を着る。通常奈良絵本では画面上下をすやり霞で覆うが、本場面左上には霞の上に山が描かれている。

中巻

【挿絵1】（図8）中納言と継母が、姫君の入内準備をする場面を描く。左が中納言で、右の褥に座すのが継母である。

【挿絵2】（図9）継母に騙された中納言は、姫君のいる西の対へ向かい入内の中止を告げる。二人の女性のうち褥に座るのが姫君で、もう一方が侍従と思われる。中納言の言う由々しき事憂き事が何を指すのか思い当たる節のない二人は、何も言えないのである。それを表すように、二人とも口元に袖を寄せ表情を隠し困惑の仕草を見せる。

【挿絵3】（図10）中納言の邸宅から逃れた姫君と侍従が、住吉にて尼君に事の顛末を語る。三人は、今も昔も変わらない、真実の親子でない故に起こる辛さを想い涙する。対象を小さく描いて広い範囲をあらわし、住吉の風景と尼君の家の寂しさを描き込む。

【挿絵4】（図11）冬も深くなった頃、姫君は尼君に仕える童に文を託し、中納言の邸宅へ遣わせた。本文中の中納言はそれを読み顔に文を押し当て泣くが、ここでは袖を涙で濡らしている。傍にいる二人の女性は中の君と三の君だろう。中納言と同様、顔に袖を寄せる。上巻の挿絵一で薄く見えた高欄はここに描かれたものと同じ形と思われる。

下巻

【挿絵1】（図12）個人蔵本のうち唯一、二紙費やされる。京より中将の縁者が訪れ、音楽などで遊ぶ。本文では中将と蔵人の少将は笛を吹き、左衛門守は笙、宰相の中将は琵琶を弾き、兵衛の助が拍子をとる。しかし挿絵には文中にない琴が描かれるなど楽器の種類が人数と共に一致しない。笛を吹く人物のどちらかが中将のはずだが、配置を考えるに主要人物に背を向けさせるのは疑問を抱く。

上巻の畳の緑色と比べると、下巻の畳の色はやや白みがかった緑色で、色味が異なって見えたため、蛍光X線分析をしていただいた（図18、19）。結果として高い強度で銅（Cu）が検出されたが、わずかに

亜鉛（Zn）とヒ素（As）も検出された[8]。

【挿絵2】（図13）姫君は二年過ごした住吉に別れを告げ、川尻から淀までは舟で京へ上った。中納言と姫君の乗る舟は屋根付きで畳が敷かれており、屋形船の形をする。並走する舟には、海産物などが載せられる。

【挿絵3】（図14）大将の邸宅で若君と姫君の袴着を祝う場面で、上達部や殿上人など大将の親しい人々が集っている。部屋の隅の大納言は姫君に自分の娘の幼いころを思い出し涙している。ひときわ小さい人物は二人の子どもで、同じ衣服を纏う。姫君と侍従は上段に座るが、本文中では几帳のほころびより覗くとあり、絵とは異なる。

【挿絵4】（図15）本文中にこの場面を特定することはできないが、継母の数々の悪事が明らかになった後の物語を描いたものと推定される。姫君たちが栄華を迎えた一方、人々に疎まれた継母は哀れな最期を迎える。その対比が屋敷の中で集まる様子と、乱れた姿で地面に立つ継母という構図に表れている。

さて、本作挿絵が抜き取られている可能性については先述の通りだが、表1に示した絵欠と思われる箇所について、さらに論拠を強めたい。そこで、ほとんど同じと指摘されている京博本[9]と挿絵及びその前後の文を照らし合わせる。

表2は京博本との比較を纏めたものである。絵欠と思われる所の前後の本文が、京博本と凡そ一致している事が確認できる。これより、個人蔵本の絵が抜き取られていること、そして挿絵があったと思われる位置を特定した。表3は各挿絵の構図を纏めたものである。個人蔵本と京博本とでは、後者の方が女房など周辺人物を多く描き込む点で異なる。構図がほとんど同じとは断言しがたいが、挿絵前後の本文と挿絵内容が凡そ一致していることから、近しい構図だったと言えるだろう。

ところで、姫君入内中止を告げる挿絵は京博本には存在しない。さらに中巻二十三紙に存在したであろう中巻第五段（神仏に姫君の場所を祈る）の挿絵についても、京博本では該当する箇所が見当たらなかった。これらは本作独自のものだろうか。

そこで、中納言が入内中止を告げる場面及び、本作中巻第五段の内容に該当する挿絵の有無を、現存するいくつかの奈良絵本と挿絵の位置を比較し検討する。

比較には③國學院大學本（甲）[10]、④國學院大學本（乙）[11]、⑤広島大学本[12]、⑥龍谷大学本[13]、⑦九曜文庫本[14]（甲）、⑧九曜文庫本（乙）[15]。⑨筑波大学本（甲）[16]、⑩筑波大学本（乙）[17]を対象とした。中には冊子状のものも含み、さらに詞書の細かい異同はあるが、話の要所は変わらないため比較の対象に含んだ。

表4はそれらを纏めたものである。通番23の入内中止を告げる場面及び、本作中巻第五段（通番38）の内容に該当する挿絵は、今回見た範囲では本作にしか見られないものであった。これらが本作独自のものと断定するのは後の課題となるが、その可能性もあると考えたい。通番45の住吉で楽器遊びをする描写は、本文と呼応して浜辺の地面の

上で行われる様子が描かれることが多いが、個人蔵本では室内で催されており珍しい。しかしこれは本作オリジナルの表現ではなく⑦九曜文庫本（甲）にも見られる。

以上二つの比較で、本作は制作当初はかなりの挿絵を有していたことが確認でき、さらにその該当箇所の見当も付いた。そして総覧できた訳ではないため断定は後の課題となるが、他本に見られない挿絵を持つことから、本作は独自性がある作品と考えられる。

三　絵画的表現

先述の通り本作は当初の姿を残していないが、現状から分かることを述べておきたい。

（一）構図と画面構成

画面の上下に凡そ二三段のすやり霞を置く。下巻第二図の舟先は左に向き、絵巻物の時間の流れに沿う。吹抜屋台の構図をとるが、より広い範囲を俯瞰しており、周囲の景観の割合が大きい。そのため人物は小さく描かれ、上巻第二図のように、本来の寝殿造にはないはずの場所に築地が存在するといった、画面の空間的整合性のなさが顕になっている。

全面に公家身分を示す高麗縁の畳が敷かれ、襖などの建具で空間が仕切られる。全図とも角柱が採用され、上巻第一図には違棚といった座敷飾り、下巻第三図には明障子と書院造風の室内である。これは制作された時代の風俗に合わせ読者に親しみ深いような空間を表したか、もしくは絵師が寝殿造を理解していない事が考えられる。

（二）人物表現

人物は正面斜め、真横、後方斜め、真後ろの角度から描かれるものの、真正面からのものはない。

顔は典型的な引目鉤鼻で、女性の輪郭は頬に丸みのある卵形、男性はやや角張った頬と顎である。目元に注目すると眉は太く、周囲をぼかし輪郭ははっきりとしない。目は引目で、下瞼は上瞼より細い線を引く。瞳は小さく、瞼に沿って左右どちらかに描くことで人物の視線を示す。鼻は眉と目の間に始まり顔の縦三分の一を占め、口は小さく紅を差す。男性の髭の有無に年齢の影響は伺えず、主に中納言と少将を区別する意味合いが強いと思われる。

髪色や顔の皺など成人以降の年齢表現はなされないが、下巻第三図の子どもは周囲の人物より極端に小さくすることで幼さを表す。

薄く口を開けることもあるが、表情の変化は乏しい。泣く描写が最も感情を表出しているが、顔に袖を近づける仕草がなされ表情は伺えない。表情よりも動作によって感情を描く。

（三）絵師

全巻を通して筆致の違いは見られないことから、同一の人物が担当していることは間違いないだろうが、他の奈良絵本の例に漏れず絵師

は不明である。

絵師の系統は定めがたいが、色彩は丁寧に塗られるものの付立はしないところから、土佐派の影響を想定し得ない。むしろ樹木の輪郭線を大きく残す所や、画中の建具に水墨画を表していることから、狩野派を学んだ絵師ではなかろうか。

おわりに

以上、個人蔵本「住吉物語絵巻」について調査報告及び若干の考察を述べた。現在挿絵を十一図残すものの、抜き取られた可能性を指摘し、他の奈良絵本と挿絵の位置を比較した。そこから、制作当初はかなりの数の挿絵を有していたことと、本作独自の描写の可能性があるものを確認した。さらなる類例の検討や顔料など数多くの課題を抱えているものの、後の研究に期待しつつ本稿を終えることにしたい。

注

（1）『日本古典文学大辞典』第三巻（岩波書店、一九八四年）五六二頁

（2）小松茂美『続日本の絵巻16　住吉物語絵巻　小野雪見御幸絵巻』（中央公論社、一九九一年）

（3）（1）に同じ

（4）嫁入り本については、橋口侯之介『続和本入門　江戸の本屋と本づくり』（平凡社、二〇〇七年）一八六頁や、石川透『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店、二〇〇三年）五二四頁を参考。

（5）西下経一「住吉物語の形態に関する研究」（『岩波講・日本文学』、一九三一年）によれば甲類第一種(a)に属する。しかし手紙では個人蔵本は他の系統も属しているとも記されている。

（6）調査には可搬型蛍光X線分析装置（BRUKERのTRACER5i）を使用し、以下の条件で分析した。X線管電圧：40kV、X線管電流30μA、測定時間：60秒、測定雰囲気：大気、測定範囲：3㎜φ

（7）慶応義塾大学メディアセンターデジタルコレクション、奈良絵本・絵巻コレクション「絵源氏」
(https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/132x-189-5-1)

（8）これは従来知られていない銅系緑色顔料の可能性もある。魚島純一、坂本直也「亜鉛とヒ素を含む銅系緑色顔料を用いて彩色された江戸時代の板絵」『奈良大学大学院研究年報』第二十四号（奈良大学大学院、二〇一九年）

（9）京都国立博物館館蔵品データベースに上巻が公開されている。
(https://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/db/index.html)

（10）國學院大學本（甲）は國學院大學図書館デジタルライブラリーで公開されている。
(https://opac.kokugakuin.ac.jp/digital/menus/index02.html)

（11）國學院大學本（乙）（10）に同じ

（12）広島大学所蔵奈良絵本・室町時代物語（デジタル郷土図書館）で公開されている。
(http://opac.lib.hiroshimau.ac.jp/portal/dc/kyodo/naraehon/muromachi_top.html)
錯簡が認められるが、絵の内容より本来の位置を推測できないものも多くそのままとした。

（13）龍谷大学本は龍谷大学図書館貴重資料画像データベースで公開されてい

る。
（http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/html/v_menu/9904.html?; 龍谷大学図書館貴重資料画像データベース）

（14）中野幸一『奈良絵本絵巻集２　住吉物語』（早稲田大学出版部、一九八七年）

（15）（14）に同じ

（16）筑波大学附属図書館貴重書コレクション（電子化リスト）で公開されている。巻子状のものである。
（https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/collection/rare）
後半欠。本文、絵と共に錯簡が認められるが、画中詞より挿絵内容を判断し表に当てはめた。

（17）（16）に同じ。こちらは一巻を欠いた冊子のものである。

参考文献

『物語文学研究叢書　第10巻　住吉物語通釈、註解新訳住吉物語』（株式会社クレス出版、一九九九）

横山重『住吉物語集（本文篇）』（大岡山書店、一九四三年）は国立国会図書館デジタルコレクションにて参照。
（https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1129656）

附記

個人蔵本「住吉物語絵巻」の調査をお許しいただきました所蔵者様、蛍光X線分析のご協力を賜りました奈良大学魚島純一教授、執筆にあたっては、原口志津子教授よりご指導ご助言を賜りました。末筆ながら心より深く感謝の意を表します。

図１　巻姿（右から上中下）

図２　上巻表紙

図３　上:裏打ちの層（裏面より）
下:裏打ちの層（側面より）

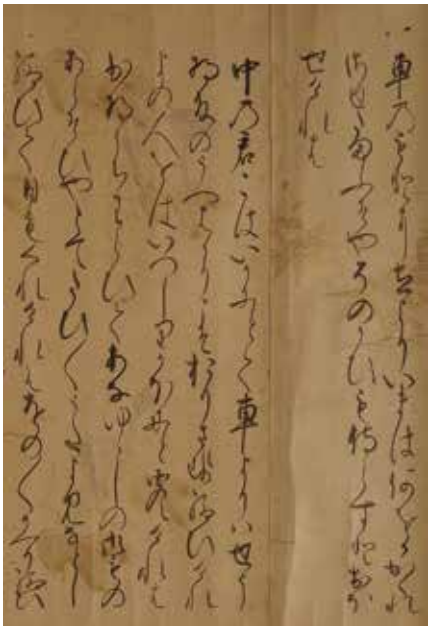

図４　上巻20紙21紙間

図5　上巻挿絵1

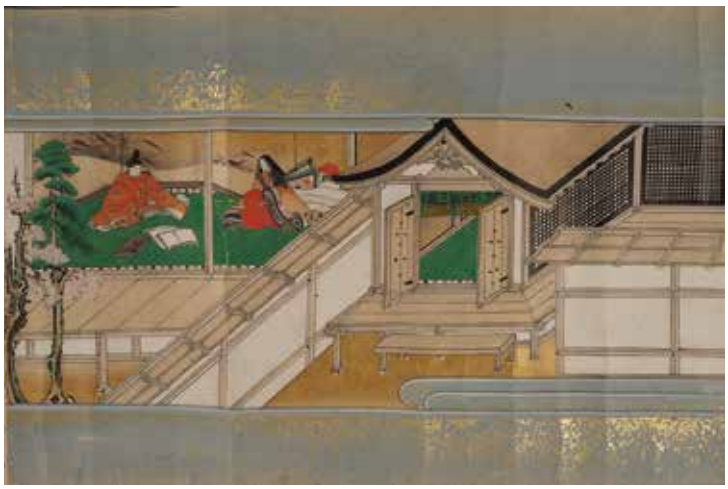

図6　上巻挿絵2

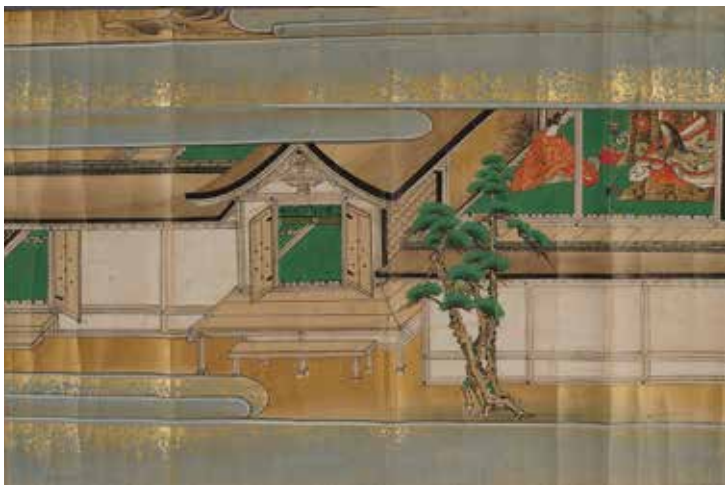

図7　上巻挿絵3

図8　中巻挿絵1

図9　中巻挿絵2

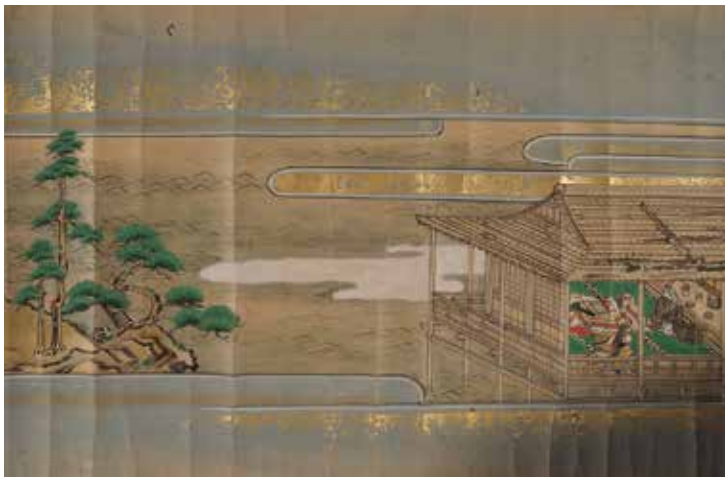

図10　中巻挿絵3

図11　中巻挿絵4

図12　下巻挿絵1

図13　下巻挿絵2

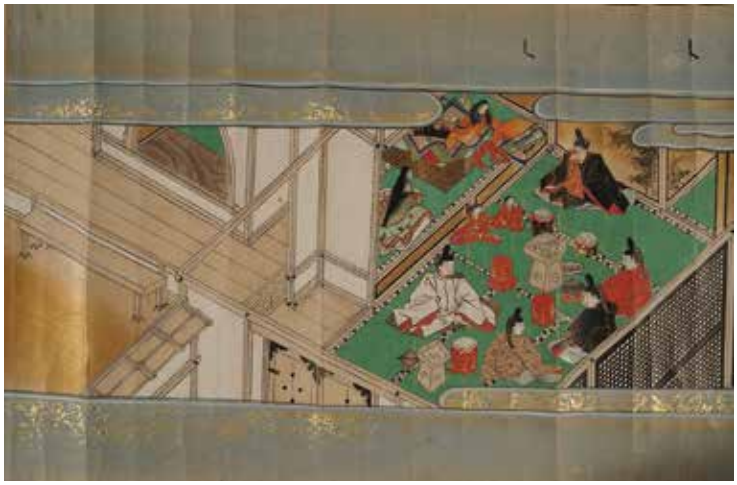

図14　下巻挿絵3

図15　下巻挿絵4

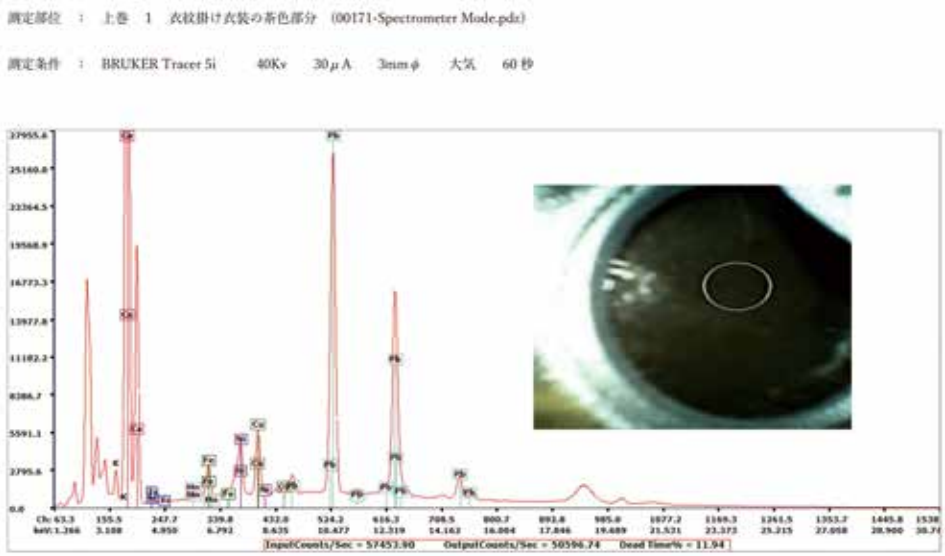

図16　上巻挿絵１蛍光Ｘ線分析結果

図17　上巻挿絵１部分
赤丸部分を分析

図19　下巻挿絵１部分
赤丸部分を分析

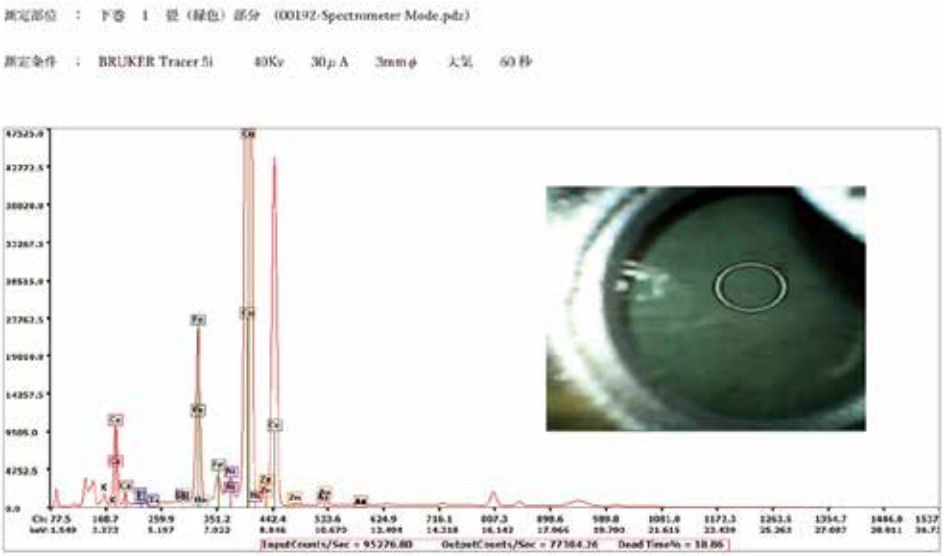

図18　下巻挿絵１蛍光Ｘ線分析結果

表１　個人蔵本「住吉物語」の料紙寸法

上巻

本紙　縦32.6

1紙横	51.0	詞書	
2紙	50.9	詞書	
3紙	14.4	詞書	切り詰め
4紙	50.8	絵	
5紙	50.8	詞書	
6紙	50.8	詞書	
7紙	50.7	詞書	
8紙	34.5	詞書	切り詰め
9紙	48.5	絵	
10紙	51.0	詞書	
11紙	4.7	詞書	絵欠
12紙	50.2	詞書	改行
13紙	50.8	詞書	
14紙	18.4	詞書	切り詰め
15紙	47.5	絵	
16紙	50.2	詞書	
17紙	50.6	詞書	絵欠？
18紙	50.6	詞書	
19紙	51.3	詞書	
20紙	8.4	詞書	絵欠
21紙	50.4	詞書	改行
22紙	50.4	詞書	
23紙	14.5	詞書	絵欠？
軸付	20.1		
全長	971.5		

中巻

本紙　縦32.6

1紙横	50.4	詞書	
2紙	25.4	詞書	切り詰め
3紙	50.5	絵	
4紙	51.3	詞書	
5紙	10.5	詞書	切り詰め
6紙	50.4	絵	
7紙	51.0	詞書	
8紙	50.9	詞書	
9紙	50.6	詞書	末余白、絵欠
10紙	51.0	詞書	改行
11紙	51.0	詞書	
12紙	50.5	詞書	
13紙	27.5	詞書	切り詰め
14紙	49.5	絵	
15紙	50.7	詞書	
16紙	22.1	詞書	絵欠
17紙	50.5	詞書	改行
18紙	8.9	詞書	絵欠
19紙	50.5	詞書	改行
20紙	50.2	詞書	
21紙	41.1	詞書	切り詰め
22紙	50.0	絵	
23紙	29.7	詞書	絵欠？
軸付	21.5		
全長	995.7		

下巻

本紙　縦32.6

1紙横	51.4	詞書	
2紙	41.5	詞書	切り詰め、絵欠？
3紙	51.0	詞書	
4紙	50.8	詞書	
5紙	50.9	詞書	末余白、絵欠
6紙	51.0	詞書	改行
7紙	27.6	詞書	切り詰め
8紙	50.2	絵	
9紙	50.3	絵	
10紙	22.0	詞書	切り詰め
11紙	51.7	絵	
12紙	51.3	詞書	
13紙	51.0	詞書	
14紙	8.3	詞書	切り詰め
15紙	50.5	絵	
16紙	51.0	詞書	
17紙	50.5	詞書	
18紙	50.9	詞書	
19紙	51.5	詞書	
20紙	25.5	詞書	
21紙	49.6	絵	
22紙	50.5	詞書	
軸付	20.0		
全長	1009.0		

表２　個人蔵本と京博本挿絵位置比較

個人蔵本				京博本		
位置	直前の本文	直後の本文	場面内容	直前の本文	直後の本文	位置
上巻4紙	なくよりほかの事はなし	とし月ふるまゝに	乳母姫君を案ず	なくより外の事はなし	とし月ふるまゝに	上巻
9紙	とかきてひきむすひてたひけれは	その日の暮ほとに	少将姫君へ文を書く	とかきてひきむすひてたひけれは	その日の暮ほとに	
11－12紙	のたまはすことはりとそおほえける	ちくせんかへりて	筑前中納言宅で文を渡す	のたまはねはことはりとそおほえける	ちくせんかへりて	
15紙	うちかよひ給へり	秋の夜の	少将と三の君の結婚	うちかよひたまへり	秋の夜の	
17－18紙	おもひきえなんことそかなしき	あらたまの	少将からの文	おもひきえなんことそかなしき	あらたまの	
20－21紙	そのかひも侍らすとおほせけれは	中の君こはいかにとて	正月・嵯峨野	そのかひもはんへらすとおほせけれは	中の君こはいかにとて	
上巻21－中巻1紙	はや九月にもなりにけり	中納言北のかたに(中巻冒頭)	少将、君があたりの歌	はや九月にも成にけり	中納言さたのかたに(中巻冒頭)	上－中巻
中巻3紙	なき事をは申さすときこえける	よもさる事あらし	姫君入内準備と継母の嘘	なき事をは申さすときこえけれは	よもさる事あらし	中巻
			六角堂の僧が西の対より出るを見る	あさましくとてたち給ひける	これよりうちまいりの事	
中巻6紙	いひのふるかたもなかりける	しきふといふ女房	入内中止を告げる			
9－10紙	なけきかしひたまふ	こみやの御めのと	姫君と侍従再び継母の謀りを知り泣く	なけきかしひ給ふ	こみやの御めのと	
14紙	すみそめの袖をしほるはかりなり	さても少将はその夜	住吉で尼君と語らう	すみその袖をしほるはかりなり	さても少将は	
16－17紙	たゝなきたまふはかり也	扨すみよしのありさま	姫君の家出を知る	たゝなき給ふ計也	さてすみよしのありさま	
18－19紙	たてまつりなとそしたまひける	扨都には中納言	住吉での生活	たてまつりなとそしたまひける	さてみやこには中納言	
22紙	なさたまふ事かきりなし	三のきみ袖もしほるはかりにて	手紙を読み泣く中納言	なき給ふ事かきりなし	三の君そてもしほるはかりにて(下巻冒頭)	中-下巻
中巻23－下巻1紙	春夏もすきにけり	長月の十日はかりに	神仏に姫君の場所を祈る			
下巻2－3紙	京の尼うへとおはすと申けり	さてこまくととひ給ひ	童に場所を尋ねる	京のあまうへとおはしましける	さてこまくととひ給ひ	下巻
5－6紙	中くをろか也	かくて二三日にも成ぬれは	姫君と再会	中くをろかなり	かくて二三日にもなりぬれは	
8,9紙	さまくあそひをそし給ひける	さてつきの日京へのほり給ふ	楽器遊び	さまくのあそひをそし給ひける	さてつきの日京へのほり給ふ	
11紙	よとまてそをくり奉りける	さて京へのほり給ひて	舟で京に上る	よと迄をくりたてまつりける	かくてそのゝち	
15紙	いかにおもひやるへし	大納言かへり給ひて	袴着	いかにおもひやるへし	大納言かへり給ひて	
21紙	世の人もちいけり	さてもまゝはゝは	後日談・繁栄	世の人もちひけり	さてもまゝはゝは	

表３　個人蔵本と京博本構図比較

個人蔵本	場面	京博本
左の畳上に姫君とそれを撫でる乳母。中央廂に侍従らしき女房。	乳母姫君を案ず	左中央畳上に姫君とそれを撫でる乳母、侍従らしき女房。左下に続く隣室に三人の女房。
左上に文を書く少将と並ぶ筑前。	少将姫君へ文を書く	左上に文を書く少将と、左手前に向き合う形で簀子に筑前。右下に四人の従臣。
絵欠	筑前中納言宅で文を渡す	中央に文を渡す筑前と受け取る侍従。部屋の奥には琴を弾く姫君と近くに二人の女房。
右上に褥に座る三の君、その左に座る少将。	少将と三の君の結婚	左に共に寝る少将と三の君。
絵欠	少将からの文	姫君の部屋の前で侍従に文を渡す少将。屏風の前に座る姫君とそのそばに童が一人。
絵欠	正月・嵯峨野	料紙三枚を用いる。右から三台の車、三人の姫君と女房、松の下で垣間見る少将とその従者二人。
絵欠	少将、君があたりの歌	簀子に立つ少将と、引き戸を開けて話す侍従と奥の屏風の前には姫君。隣室には三人の女房。
左に中納言、右に継母。三種の調度品を前に置く。	姫君入内準備と継母の嘘	向かい合う継母と中納言。その右隣りの部屋に三人の女房。
絵欠	六角堂の僧が西の対より出るを見る	料紙二枚を用いる。中央に中納言、その右に継母や女房達、左に従者ら男性。
右から褥に座り泣く姫君、侍従、簀子に中納言の後ろ姿。	入内中止を告げる	なし
絵欠	姫君と侍従再び継母の謀りを知り泣く	左の部屋に姫君と侍従、隣室に五人の女房。
右の屋内に尼君と姫君と侍従。左には海が続く。	住吉で尼君と語らう	左の屋内に尼君と向かい合う侍従と姫君。右の門前には車と三人の男性。
絵欠	姫君の家出を知る	文を前に泣く中納言。その周囲に中の君三の君を含むか六人の女房たち。
絵欠	住吉での生活	二枚の料紙を用いる。屏風の前に姫君、その手前に侍従、左の海を背に尼君。海には帆を張る船が浮かぶ。
畳上左に中納言、畳上右と簀子に中の君と三の君と思われる女性。	手紙を読み泣く中納言	屏風の前で泣く中納言を中央に、対面と右に六人の女房、左に三人の男性と童。
絵欠	神仏に姫君の場所を祈る	なし
絵欠	童に場所を尋ねる	海を背に左から従者二人と中将、童と松の落ち葉を拾う二人。
絵欠	姫君と再会	屏風の前で並ぶ中将と姫君。手前には尼君と侍従。部屋の外には中将の従者二人。
料紙二枚を費やす。屋内で楽器を奏でる七人とその左に三人。右の御簾の内には姫君と尼君、侍従が並ぶ。	楽器遊び	中央に楽器を奏でる中将と縁者の六人。左の御簾の内には尼君と姫君、侍従。右下に二人の男性。
二隻の舟の内奥の方で御簾に仕切られた空間に中将、姫君、侍従。人が多く賑わう様子。	舟で京に上る	料紙二枚を用いる。二隻の内手前の屋形舟に姫君と侍従、女房と中将ら。奥の舟に童など。左の料紙に画面を大きく横切って橋が架かる。
左上の上段に姫君と侍従、その前に二人の子ども、右奥で涙する大納言。手前には大将を含む四人の男性。	袴着	右上に大納言、その左に二人の子どもと屏風前に大将。左下に三人の男性。姫君と侍従は描かない。
屏風の前に大将夫婦と二人の子ども。手前に三人の女房。簀子には中の君と三の君か。左の地面に継母が立つ。	後日談・繁栄	料紙二枚を用いる。左の御簾の前に大将夫婦と二人の子ども。その周囲に女房や従臣ら。継母の姿はない。

表４　「住吉物語」挿絵位置比較

						錯簡				錯簡・後半欠	1巻欠
番号	場面内容	①個人蔵本	②京博本	③國學院本(甲)	④國學院本(乙)	⑤広大本	⑥龍谷本	⑦九曜本(甲)	⑧九曜本(乙)	⑨筑波本(甲)	⑩筑波本(乙)
1	母宮亡くなる			○	○	○					
2	乳母姫君を案ず	○	○	○	○		○	○		○	
3	二人の姫君と打ち語らう			○	○				○	○	
4	継母と乳母、姫君の境遇を思う									○	
5	少将姫君へ文を書く	○	○	○	○	○			○	○	
6	筑前中納言宅で語り文を渡す	上巻11－12紙	○	○	○		○	○		○	
7	筑前少将へ姫君の様子を伝える									○	
8	継母筑前へ袿を渡す			○	○	○		○		○	
9	筑前継母へ文を渡す						○				
10	三の君返事を書く								○	○	
11	筑前少将へ三の君の文渡す			○							
12	少将と三の君の結婚	○	○								
13	秋の夜姫君の琴の音を聞き悟る			○	○	○				○	
14	少将、筑前へ恨みを伝える									○	
15	少将からの文	上巻17－18紙	○	○			○	○	○	○	○
16	正月・嵯峨野	上巻20－21紙	○	○	○		○	○	○	○	○
17	姫君の乳母亡くなる			○	○	○				○	
18	少将立ち聞き、侍従を見舞う			○	○					○	○
19	少将とのやり取り									○	○
20	少将、君があたりの歌	上巻23紙	○							○	
21	姫君の入内準備と継母の嘘	○	○				○	○			○
22	六角堂の僧が西の対より出るを見る		○	○	○	○			○	○	
23	入内中止を告げる	○									
24	継母の謀りを聞く						○	○		○	
25	姫君を内大臣の御子へ嫁がせる										○
26	三の君乳母と主計助								○	○	
27	姫君と侍従再び継母の謀りを知り泣く	中巻9－10紙	○	○		○				○	○
28	尼君へ文を書く							○			
29	尼君手紙を読み泣く/やり取りの様子			○	○				○		○
30	思い悩む姫君と侍従					○	○		○		○
31	尼君と会い住吉へ向かう			○							○
32	姫君の家出を知る	中巻16－17紙	○			○	○	○			○
33	住吉への道中						○		○		
34	住吉で尼君と語らう	○	○								○
35	住吉での生活	中巻18－19紙		○	○	○		○	○		○
36	姫君より手紙が届く			○	○						
37	手紙を読み泣く中納言	○	○	○	○			○			
38	神仏に姫君の場所を祈る	中巻23紙	○								
39	初瀬に籠り夢想を得			○	○	○		○			
40	姫君の夢								○		
41	住吉へ向かう						○				○
42	童に場所を尋ねる	下巻2－3紙	○	○		○		○			○
43	尼君の家で再会	下巻5－6紙	○	○	○	○	○	○	○		○
44	姫君と語る				○						
45	楽器遊び	○	○	○	○			○	○		○
46	舟で京に上る	○	○				○	○			○
47	若君姫君の誕生			○	○	○			○		○
48	袴着	○	○	○	○		○	○	○		○
49	大納言、姫君と再会			○							○
50	後日談・繁栄	○	○	○	○	○	○	○	○		
51	後日談・継母										○
	合計数	11	20	27	22	15	15	18	16	20	22

・個人蔵本には表1に示した絵が抜き取られている可能性がある個所も記した。
・個人蔵本における中巻23紙は、絵が抜き取られている可能性があるものの、該当箇所が不明。

Abstract

On the private collection Sumiyoshi Monogatari of Nara-ehon.

Aki TANAKA

The Sumiyoshi Monogatari, like the Ochikubo Monogatari, is a typical stepchild tale. Many works of this story have been preserved in Nara-ehon, and the one work presented in this paper is one of them.

This paper reports on a survey of the three volumes of the Sumiyoshi Monogatari, Nara-ehon in scroll form in a private collection, and attempts to make a few observations. In the research report, I first gave an overview of the work, and then described the plot and illustrations for each section.

Next, I paid attention to the possibility that the illustrations in this work were missing, and compared the position of the illustrations with those in Sumiyoshi Monogatari, Nara-ehon, From this comparison, I pointed out that this work may have had considerable illustrations in the beginning.

I also touched on painting expression and examined it from three perspectives: composition and screen composition, expression of the human figure, and the painter.

Key word：①Sumiyoshi Monogatari　②Nara-ehon　③picture scroll　④illustration